

《ゼミ活動報告》

米軍基地が沖縄にもたらしたもの（熊本ゼミ）

本稿は、2023年度熊本ゼミ（3年）による沖縄研修の成果報告書である。2019年までは学科所属の学生有志を募って実施していた沖縄研修だが、コロナ禍で実施できなかった2年間をはさみ、昨年度より3年ゼミで行うこととした。

前期から沖縄および米軍基地についての事前学習をはじめ、学園祭休みの期間を活用して研修を実施した。なお初日と最終日は、沖縄戦や米軍基地問題について現地を巡るガイドプログラム、および議論を深めるための独自のワークショップ・プログラムを提供している「株式会社さびら」のコーディネーターを受けている。また二日目も同社スタッフに同行いただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

〔沖縄研修概要〕

・実施日：2023年11月1日（水）～11月3日（金）

・訪問先

初日：道の駅かでな、コザ・ヒストリート、北谷町砂辺地区、アメリカンビレッジ

二日目：辺野古集落

最終日：佐喜真美術館、嘉数高台公園、上大謝名さくら公園、沖縄国際大学、浦添西海岸（那覇軍港移設予定地）

1. 訪問先での学び

1. 1 道の駅かでな

大中はるひ

沖縄研修1日目、那覇空港からすぐに道の駅かでなに向かった。道の駅かでなは沖縄県嘉手納町にある道の駅であり、嘉手納基地の離着陸を展望台から見ることができる観光スポットとして2003年にオープンした。その後、2022年にかけて増設工事が行われ、基地側に35メートルほどせり出す形で新展望台が完成している。他にも基地を抱える町の現実や嘉手納町の文化や歴史について学ぶことのできる学習展示室も併設されている。

まずは嘉手納町と嘉手納基地について整理したい。沖縄県嘉手納町は沖縄本島の中部に位置し、東シナ海に面した西海岸線に接する町である。那覇市からは北へ約23kmの地点にあり、北は比謝川を境に読谷村に接し、南東部は嘉手納基地内に

組み込まれている。なお嘉手納基地は嘉手納町と北谷町、沖縄市の3つの市にまたがっている。嘉手納基地は世界各国の米軍基地の中でも広く、かなり重要視される基地になっている。

町の面積は15.12平方kmで、沖縄本島中部にある市町村のなかでも比較的小さな町だが、面積の約82%が嘉手納基地として接収されており、まちづくりなどに大きな制約がある。

第2次世界大戦時には米軍の沖縄本島最初の上陸地点にもなった。戦後は米軍の飛行場管理が強化され、全面的に通行立ち入りが禁止されるようになった。その後、朝鮮戦争の勃発等により、米軍は嘉手納基地を重要視するようになり、だんだんと整備拡張が行われていく。そのつど、宅地や農地は軍用地に姿を変え、住居地域を一層せばめていった。膨大な面積を基地に奪われ、残された僅かな地域で住民は生活を強いられるようになって

た。

嘉手納基地が占める面積のうち、9割以上が私有地である。占領期も土地の強制接収で拡大していったため、地主数も1万人を超える。このため年間239億円を超える賃借料が日本の税金から土地所有者に支払われており、大きな収入源となっている。

また嘉手納基地は住居地域が飛行場に近接しているため、爆音、飛行機墜落事故、燃料流出などの基地被害が多く、「基地の町」として、嘉手納は沖縄の縮図だといわれてきた。

道の駅かでなの施設内にはところどころに騒音測定器が設置され、戦闘機・輸送機が上空を飛ぶことでどのくらいの騒音が出るのかを数字で知ることができる。私たちが昼食をとっている時間も何度か米軍機が飛んでおり、その音はかなり大きい時もあった。騒音測定器はdBで表示されていた。dBは人間の聴力を表すときに用いられるが、基本的には0~100強の数字が用いられる。上空を飛んだ時の測定器の値は98 dBを示していた。100dBに近いこの音は電車が通るときのガード下と同じくらいの騒音であり、実際にその場にいた私もかなりうるさく感じた。

昼食後は展望台と学習展示室に向かった。展望台からは嘉手納基地が一望でき、基地の広さがよくわかる。基地は東京ドーム約400個分の広さを持つ。3700メートルの滑走路が2本あり、米軍機の離発着を見ることができた。

学習展示室には、基地が近くにあることで生じる騒音とにおいを体験することができるブースがあった。コーヒーの粉のかすのような排気ガスのおいがかきつく、長時間嗅いでいたら気分が悪くなりそうだった。

道の駅かでなの目の前は基地であるが、基地と道路が区切られたフェンスの向こう側に畑のようなスペースがある。このスペースは「黙認耕作地」という。「黙認耕作地」は在日米軍が接収した軍

用地のうち、米軍が地主などの住民に対して一時的に使用を認めている土地のことだ。私たちが見学していた時も畑の持ち主であろう人がフェンスを出入りしていた。

今回の研修でお世話になった「株式会社さびら」の狩俣さんは黙認耕作地の説明をしたうえで、「『基地は誰の土地に建っているのか？騒音は慣れっこなのか？土地を返してほしいという住民の願いはどうなるのか？』ということについてぜひ考えてほしい」と話していた。

また狩俣さんは移動中、車の中で「基地があることによる地下水の汚染」についても話してくれた。嘉手納基地では今基地周辺の地下水から高い値の有機フッ素化合物（PFAS）が検出されている。2022年度県環境保全課登記残留実態調査の結果では、沖縄県内44地点のうち30地点で国が定めた暫定指針値を超えた値が出た。なかでも最も高い値が出たのが嘉手納基地周辺であり、住民には地下水を飲まないよう注意喚起がされている。沖縄県は、普天間と嘉手納の両飛行場周辺の湧水における汚染について「両飛行場が汚染源である可能性が高い」として、国や米軍に対し立ち入り調査や原因究明を求めているが、調査は許可されていない。

人の飲み水となり、生活を支える地下水。水道などから水を飲むことができるのは当たり前と考えていたが、基地周辺ではそれもかなわない。もとは嘉手納に住んでいた人々の土地が奪われ、水まで汚染されてしまうことは住民にとってどれだけ悲しく、悔しいことだろうか。立ち入り調査が可能になることが優先であるが、国や米軍がこのことを重く受け止め、住民たちと話し合いや改善策を考える機会が失われていることにも原因があると感じた。

今回の研修を通して基地が想像以上に沖縄住民と地域に密接機関係していることがわかった。道の駅かでなは米兵も多く利用しているようで、

イートインスペースで食事をしていました。米兵が利用している一方で、学習展示室には嘉手納基地の歴史と共に基地の返還を求めるような内容が展示されている。施設内のお土産物売り場にも地元発展のために基地を利用している部分もあったが、やはり基地反対の意見が多いように感じられた。

地主でも立ち入ることができないことや騒音・汚染水問題なども含め、基地は負の面が多い。基地に依存した構造は「そうせざるを得ない」状況がつくられてしまっていることに原因があると思った。しかしその構造を変えるにはどうしたらいいのか、何ができるのか。かなり難しいが、上空を飛んでいた米軍機の大きな音に顔をしかめる人が多かったことに何よりも人々の気持ちが表れているように思う。

嘉手納基地に関しては「黙認耕作地」や「汚染水」の問題も含めて元は地域住民の土地であったことを主に述べた。「土地を返してほしいという住民の願いはどうなるのか？」という狩俣さんの問いはすぐに答えられるものではなく、嘉手納町が置かれている状況と住民の気持ちが複雑に絡まり合っていると感じた。

【参考文献】

沖縄県嘉手納町 嘉手納町の歴史

<https://www.town.kadena.okinawa.jp/kadena/history.html>

音の大きさとdB（デシベル）の目安 <https://sengakuhisai.com/db-oto-ookisa-meyasu/>

道の駅かでな <https://michinoeki-kadena.jp/>

1. 2 コザ・砂辺地区

土屋 陽

私は今回、コザと呼ばれる街を見てきた。街を訪れた印象としては、かなりアメリカ色に染まっている街だな、と感じた。飲食店や洋服店など外観や商品値段の表記も英語だったのが印象的だった。

コザ・ストリートと呼ばれる町並みを歩くとアメリカ人の方もかなり多かった。その先には米軍基地がある。ゲート近くのバーの看板には、ゲート側に「FIRST CHANCE」、裏側に「LAST CHANCE」という文字が書いてあった。ゲートに最も近いところにあるバーなので、そう書いてあるのだ。沖縄を舞台にした、米兵による性的暴行事件の真相を追う社会派エンターテインメント作品『FENCE』のロケ地として使われた場所でもある。

そもそもコザという街は、沖縄戦終結後の1945年9月、難民収容所が設置された市町村を中心に急激に人口が増えたことで市制が敷かれ、越来村が胡差市となり、翌年には市制が解かれ、再び越来村、美里村に戻った後、1956年6月、越来村はコザ村に改称し同年7月に市へと昇格しコザ市が誕生した。そして現在では沖縄市になっている。

街には色々な国の店が建ち並んでおり、中にはインド料理のお店もあった。元々インドはイギリスの領地だったというのも関係しているらしい。他にも民間の土地を軍用地として貸出する不動産もあった。

コザ・ヒストリートという展示館を見学した。沖縄戦の貴重な資料や実物などが多く展示されている場所だ。沖縄戦当時の降伏調印の様子や、コザ暴動と呼ばれた当時の写真も展示されている。コザ暴動とは、米兵が沖縄市民を巻き込んだ事件が発端となり市民が暴動を起こしたもので、今の基地運動とつながる部分があるのかもしれない。

「猫・ネズミ論」という言葉を聞いたことがあ



コザの風景

るだろうか。これは猫を米軍、ネズミを沖縄と比喩したもので、この言葉から伺えるように常に沖縄は米軍に追われているというイメージがどうしてもあるのだろう。自分自身も沖縄から基地をなくせるとは正直思っていない。かと言って無責任になるのではなく、沖縄の負担を軽減し、少しでも不安を取り除く努力は不可能ではないと思う。

アメリカの統治下にあった当時のコザは、米兵にとっては帰休兵士たちの癒しの場だったという。今もそういう認識があるのかも知れない。それが間違い・正解という訳ではないが、そちらばかりではなく、沖縄市民がどう思っているかを果たして認識できているのだろうか。コザという街を今回全てを知ることは正直できなかった。だが街並みやストリートを見て感じたことは、沖縄の今と昔を知り、その上で今、何を思うかを考えることだと思う。

その後、米軍住宅が多く建っている、北谷町の砂辺集落を訪問した。砂辺集落では1日60回ほどの騒音被害がある。民家の真上を米軍の戦闘機やヘリなどが飛んでいるからだという。そのため約半数の沖縄市民がその地を離れたそうだ。そこに米兵がはいってきた。

だが米兵にとってはアメリカ人のコミュニティとしてはかなり良い土地だという。実際アメリカ人の子供が通っているであろうスクールもあっ

た。基地のゲートからも近く、家賃も特別手当も支給されているという。

沖縄市民が使わなくなってしまった場所に米兵が住む。なんとなく流れはできているかも知れないが、その反面大きな問題もあった。それは家や車などの不法投棄だ。実際、明らかに使われていないだろう車も路上に置かれていた。ただあるだけならばその所有者に判断を仰げばいい。だが問題なのはその後始末をするのが沖縄県、つまり日本側にあることだ。日米地位協定や安全保障条約がある以上、その人が沖縄から離れてしまうとそこからの責務を追うことが出来ないのだという。その結果その周辺住民の税金の支払いも増え、県としての予算もかなり使ってしまったという。

このことから分かるように米兵にとって砂辺集落は、基本自分の好きなように使った後、都合に合わせて手放すことも出来てしまうという実情を知り、全ての人がそうでなくても、そうしたことがある以上悪いイメージをなくすのは難しいと感じた。

1.3 どのようにしてアメリカンビレッジは発展したのか

田中風花

アメリカンビレッジはデポアイランドをはじめ、様々な商業施設やギャラリー、エンターテインメント施設やアミューズメント施設が揃った観光地だ。以前は米軍基地があり、土地返還がされた後その土地を利用して再開発を行って今の姿へと発展していった。

私は実際にアメリカンビレッジを訪れてみて、完成された雰囲気施設の、施設近くにある浜辺の美しさに驚いた。また、アメリカンビレッジは人でぎわっており、観光地として成功している印象を受けた。

このような歴史があるアメリカンビレッジが、

どのようにして観光地として成功したのか、例の少ない軍用地返還された後の経済発展に興味を持った。また、経済発展していったアメリカンビレッジのある北谷町への影響についても述べていこうと思う。

北谷町は沖縄本島の中部に位置し、東シナ海に面した西海岸の町である。沖縄戦で米軍の上陸地点になった北谷は村全体を接収され、終戦後は、田畑があった場所に兵舎や飛行場が建設されることになる。村面積の65%を軍用地が占め、当時は第3次産業の勤労所得が全体の86%と多くの人が軍雇用者だった。

現在は、町内にキャンプ瑞慶覧、キャンプ桑江、嘉手納飛行場、陸軍貯油施設の米軍基地があり、そのほとんどが平地で国道58号沿いの利便性に富む地域に集中している。町土面積13.91km²のうち約51.6%を米軍基地が占めており、米軍基地による航空機の爆音や軍事訓練での事故、危険物質の流出汚染被害が問題になっている。

復帰後の沖縄は長期にわたる本土との行政分離によって、社会制度や産業振興など多くの面で格差が広がっていた。それらの問題解決に向けて、当時の琉球政府は沖縄の各市町村長に振興計画の策定を依頼していた。北谷村も村振興計画を策定し、内容としては北谷村にある基地の返還と埋め立てで基地依存から自立経済へ移行すると掲げた。まちの将来像を掲げた計画書は1973年に完成し、町と議会、軍用地主会は政府に土地返還の要請を重ねていった。復帰後の村振興計画策定の際に企画室長を務めた比嘉吉光さんによると、その基地返還要請の内容には、基地によって集落が分断され、地域の学校にも通えない子どもの現状や、土地返還がなされた後の発展の具体的なビジョンを明記することで説得力をもたせたと語っている（『沖縄タイムス』2022.4.10）。

交渉を重ねた結果、1981年にハンビー飛行場とメイモスカラー射撃訓練場が返還され、村振興計

画にあった土地開発が始まった。町は当初リゾート用地を県に提案するが、既にホテルの供給は足りていると却下される。その後、経営コンサルタントと町幹部によって「美浜タウンリゾート・アメリカンビレッジ」が計画された。開発にあたって、基地被害を強いられる沖縄で米軍がコンセプトのまちづくりには反発もあったが、米軍をコンセプトにしたリゾート施設がなかったことや、沖縄とアメリカの文化が混在した町の特性を生かす開発だとして計画は推進されていった。

さびらの野添さんから聞いた話によると、アメリカンビレッジが工夫した点として、観光客のみではなく県民にも楽しめるような施設にしたことや、商業施設のテナントにはチェーン店や外資系ではなく沖縄の企業を置くなど、利益が県民に還元されるようにしたことが挙げられるという。また商業施設以外にも、敷地内の道や海沿いの遊歩道を整備し、電線の地中化なども行った。

このようにして、観光産業で発展した北谷町だが、その一方で人口問題や定住促進が課題といった面がある。地価の高騰によりマンションの価格は上昇し、そもそも町の半分以上を基地が占めていることから住む場所が限られているのだ。さらに、町全体のブランド化によってセカンドハウスも増加しており、町に住みたくとも移住しづらい状況となっている。

結論として、アメリカンビレッジは基地依存経済にあった北谷を自立型経済へと転換させたまちづくりの成功例であるといえる。復帰後は村人の大半が軍雇用者であったにもかかわらず、基地依存のままで良しとせずまちづくりを行ったその見通しに素晴らしいと思った。そしてその開発を行うために、北谷の人びとが粘り強く政府と交渉を重ねた結果、土地の返還にまでこぎつけたことを忘れてはならないと考えた。

【参考文献】

- 伊集竜太郎、2022、「[ウチナーいまむかし探訪] (1) 北谷アメリカンビレッジ 沖縄経済、発展の象徴 埋め立て地をリゾート化」『沖縄タイムス』2022年4月10日付朝刊。
- 北谷町、2023、『北谷町と米軍基地』
<https://www.chatan.jp/seikatsuguide/beigunkichi/chatanbeigun/chatanchotokichi.html>, (2023年12月11日アクセス)

1. 4 基地問題ワークショップ

井上悠馬

さびらさんの企画による「基地問題ワークショップ」は、沖縄の人たちの基地についての典型的な意見が書かれた24枚の証言カードを使って、肯定から否定、小さい問題から大きい問題と分け、それぞれのカードに書かれた基地問題を考える時間だった。グループに分かれて並び替えていくなかで、なぜそう思うか、なぜこうなるのかを説明しあうことで、基地問題の「当事者」になったつもりで取り組むことができた。

しかしいくら当事者のつもりであるといっても、基地問題のカードに書かれている内容を東京の自分が見て、「こうなんだろうな」という、あくまで想像の域を出ない感じ方しかできなかったことを、実際にやる中で感じていた。他のグルー

プや自分のグループメンバーが話している意見や、それを裏付ける理由も間違えてはいなかったし、恐らく当事者も同じ意見であるとは思っただけけれど、実際に沖縄に住む自分の同年代や基地問題に関する活動などを一切してない一般の沖縄県民、いわゆる「パンピー」の意見を聞いてこそリアルであると感じた。

実際に基地問題に関してはパンピーの同年代の声を聞く機会があった。基地問題における騒音であったり移設問題、アメリカ人に対する印象などは自分たちの考え方と近くもないし遠くもないといった印象を持った。大筋としては間違えては無いのだが東京から来た自分たちの方が基地問題に対してとても「神経質」になっていると感じた。当の沖縄に住む同世代は、家族が軍雇用員であったりするなどアメリカ人や軍が小さい頃から身近なものであるし、生活の一部である人もいる。これと同じケースがワークショップの証言カードにもあり、実際にリアルを見ることによってその証言カードの重みが変わった印象がある。

普天間に住む人と那覇市に住む人で基地問題に対する感じ方は違うし、おそらく他の沖縄のパンピーに聞けばもっと意見は出てくると思う。基地問題ワークショップの証言カードは実際の声を基に作られているが、実際に自分がその証言をリアルで聞いてから取り組むとまた基地問題ワークショップの組み立て方が変わると思った。基地問題ワークショップは外野である私たちがやることにも意味はあると思うが、沖縄県内で例えば普天間に住む人と辺野古に住む人でグループに分かれて取り組んでみたら面白くなるのではないかとも思ったりした。



ワークショップの様子

1.5 佐喜真美術館

青山幸樹

佐喜真美術館は、沖縄の絵は沖縄に置きたいという画家の丸木位里・俊(いり・とし)夫妻の願いを受けた佐喜真道夫氏の手によって、1994年11月23日に建てられた。この美術館が建っている場所はもともと普天間基地に組み込まれていた土地である。美術館を建設するため、沖縄県や宜野湾市の文化部門に問い合わせたものの、行政にはその気がなかったため、いくつもの会議を経て、最終的に日本政府の外務大臣、防衛大臣、アメリカの国務長官、国防長官が決定するという返還の手続きをとるやり方しか残っていなかったという。

そこで年に4～5回ほど防衛施設局に出向くも、毎回同じ返答であったことから、そもそも防衛施設局が仕事をしていないことに気付く。その後、当時の桃原正賢宜野湾市長のもとを訪ね、美術館建設の意志を伝えると、当時の比嘉盛光企画部長が担当になり、比嘉氏の尽力で在沖米国海兵隊基地不動産管理事務所のポール・ギノザ所長に会うことができた。そこで「美術館をつくりたいので土地を返してほしい」と要請したところ「ミュージアムができれば、宜野湾市がよくなりますね。われわれには、問題ありません」と思われぬ反応があった。それから1年後の1992年2月、1801㎡の土地が返還され、建設に至ったという経緯がある。

ここからは館内には多数の作品が展示の中で、佐喜真淳(道夫氏のご子息)さんにご紹介いただいた「ちびちりがま・しむくがまの図」と「沖縄戦の図」について記述する。

まず「ちびちりがま・しむくがまの図」についてである。「がま」とは自然洞窟を指す沖縄の言葉で、沖縄戦で米軍が本島へ上陸時、住民はこの2つの洞窟に分かれて避難した。元来、村の住民はアメリカ人を恐れていて(アメリカ人に殺されると教わってきたから)、ちびちりがまの内部は

大混乱に陥り、集団自決が発生し大勢の人が亡くなったという。

一方でしむくがまの内部も混乱に陥っていた。米軍がすぐそこまでやってきて洞窟内が緊迫した状況の中、ハワイから帰国した住民2人が「アメリカ人は怖くない」と発言し混乱を抑えたことで集団自決を防ぐことができ、最終的に1人も死者を出すことなく全員が助かった。その2つの当時の様子が描かれた作品になっている。

続いて「沖縄戦の図」についてである。丸木夫妻の作品製作は、たくさんの取材とデッサンを用いて行われる。戦争体験者の人は当時の着物などを大事に取ってある場合が多く、そういった小物をはじめ、たくさんデッサンを重ねていったことで、デッサンはモノだけではなく、体験者の話を聞きながらゆっくりじっくり似顔絵も描くという特殊なコミュニケーションを行いながら作品を仕上げていった。形を写すだけではなく、相手の心や精神、魂を感じ取りながら形に映すことで、普段では聞けないような話や言葉にならなくても感じたもの、受けたものが絵にぶつけられている。着物の柄、持ち物はリアルに描かれているが、作品にはリアルな部分とそうでない部分がある。ここでは4つ例に挙げる。

1つ目は、日本アメリカ双方の兵隊がいないということである。これは地上戦、戦争になったとき大変な目に遭うのはそこに残された人々であり、それを描くというコンセプトであるためだ。

2つ目は、自画像が作品の端に描かれているということである。画家が自分の顔を作品に入れるということは、残された人々や亡くなった人の立場になって描きます、という意味表示である。

3つ目は、綺麗な身体で描かれているということである。これは、その人の尊厳や命の大切さ、仏性や魂をバラバラにされてはいけなく、破壊されてはいけなくという思いからである。また、沖縄戦の図は子供にも見せることのできる表現で描

かれている。

4つ目に、目が白いままということである。画家は目を大事にするといい、黒目で精神や魂を表すと言われている。沖縄戦の話は集団自決といういちばん辛いところの記憶だけが抜けている、記憶の空白がたくさんあるという意味や、記憶が真っ白になってしまった瞬間はどういった気持ちだったかは想像しきれないために勝手に描くわけにはいかないといった意味合いが白目には込められているからである。

しかし、目が白くない例外もあり、作品の端のほうに描かれている3人の子供には黒目がある。これには「こどもは未来を作る人であるから、それを未来の人に向けてしっかり語り継いでいってほしい」という画家や人々の願いが込められている。

最後に、沖縄戦の図に描かれている「集団自決」についてである。作品には、集団自決が国のためではないという意図、集団自決は手を下さない虐殺だということがはっきりと描かれている。作品に描かれた菊の花や桜の花はアジアに対する加害の歴史を意味していたり、久米島の朝鮮人虐殺を悼む「痛恨の碑」が描かれていたり、被害のことだけではなくそこに至る加害の問題などもはっきり描かれている。

沖縄で家を借り、庭に色紙を敷いて描くスタイルのこれらの作品は、丸木夫妻だけでなく沖縄の人々と一緒に描いた図である。日本人として戦争を考えるとときなを描くべきか、ということと、作品に込められている思い、先述した通り未来の人に向けてしっかり語り継いでいってほしいという丸木夫妻と人々の願いを後世に残す、伝えていくことが大切だと語っていた。

この美術館を見学する前と後で、戦争や集団自決に対する自分自身の見方や考え方が180度変わるような、そんな体験だった。この時代を生きているからこそ過去のことから学び、考えることが

重要であると思わせてくれた、とても貴重な体験だった。

1. 6 嘉数高台公園

前田航大

私たちの研修の目的は、沖縄の米軍基地に焦点を当て、基地による問題や被害、その現状と基地周辺住民の暮らしについて学ぶことである。その中で、本レポートでは嘉数高台公園について取り上げ、「株式会社さびら」のガイドの方から伺った話しも含め論じていく。

嘉数高台公園とは、沖縄戦の激戦地であった沖縄県宜野湾市の南西に位置する標高92メートルの丘に造成された公園である。修学旅行で訪れて平和学習をする定番の場所であり、人気の場所でもある。また、現在も一部工事が続いているが、2022年まで3年程度の月日をかけて大規模な工事が行われリニューアルされていた。そのため、新しく綺麗な公園で遊ぶ機能を豊富に備えただけでなく、沖縄戦について肌感じて平和学習のできる公園となっている。

この公園の大きな特徴の1つとして、高台の頂上には地球儀を模した3階建ての大きな展望台が設置されている。この展望台は1992年5月に竣工され、昨年で20周年を迎えた。そして、急こう配の階段を登った展望台からは普天間基地や宜野湾市の街並み、東シナ海を見渡すことができる。しかしながら、宜野湾市のホームページの説明では、「北は残波岬、西は慶良間諸島などが見えます。」との記載がなされており、普天間基地に関して一切の記載がない。このことから、宜野湾市が米軍基地を見るためではなく、平和を願うために造成したのだ、と主張していることを理解することができる。また、展望台の3階には普天間基地に関する情報を記載した看板や、知花栄幸が作詞した沖縄戦や終戦への想いが込められた「嘉数(カカジ)高台の詩」が刻まれた石碑が置かれていると

ともに、恒久平和や宜野湾市民の子孫繁栄、核兵器廃絶と軍備の縮小を願った「平和都市ぎのわん」の石碑も置かれている。そのため、展望台が地球儀を模して設置されている理由として、石碑の内容から想像するに、平和を願うためであると考えることができる。

しかし、先述したように嘉数高台公園は展望台だけが特徴であり、魅力ではない。その他に、沖縄戦で受けた無数の砲撃の跡がしっかり残り、日本でも残っている数が少ないコンクリート製の「トーチカ」や、沖縄戦開戦前の準備として日本兵や嘉数の住民とともに築いた「陣地壕」が残されている。さらに、沖縄戦で尽力し亡くなった京都府出身の将兵2,530名有余の方と戦いに巻き込まれて亡くなった住民の冥福、沖縄と京都とを文化と友好の絆で結ばれることを願い、京都府民によって建立された「京都の塔」や沖縄戦に動員され、亡くなった朝鮮人を弔うために建立された「青丘之塔」がある。

沖縄戦の主戦場であり、沖縄戦の被害を受けた遺物を実際に間近で見て、掲示されている情報をもとに平和学習を行い、高台に登れば、復興した現在の街並みと返還予定から30年近くも経過した普天間基地を観ることのできる嘉数高台公園という場所で考えられることはさまざまある。また、沖縄戦の主戦場であった場所が現在では平和学習に活用される場所として機能していることは非常に貴重であるとともに、遺されるべき場所、遺すべき場所であると考ええる。

最後に、嘉数高台公園の現在は、家族や子どもたちが笑顔で元気に遊ぶ姿が見られる微笑ましい場所となっている。このように遊具が豊富な公園と平和学習のできる公園が融合している場所を私は初めて訪れた。そこで、嘉数高台公園は、私のように平和学習のために訪れる者と公園で楽しく遊ぶために訪れる者のように、一見交わることが無い者同士が交わる契機となる場所である。さら

に、公園の遊具で遊んでいた未就学程度の子ども達が成長していくとともに、身近に存在する沖縄戦の遺物に対しての感じ方や向き合い方が変化していくと想像すると、期待感に溢れて嘉数高台公園での研修を終えた。

【参考文献】

ぎのわん観光サイト「嘉数高台公園」(https://www.city.ginowan.lg.jp/sightseeing/tourist_attractions/7130.html 2023年12月2日アクセス)。

1. 7 沖縄研修を通して見えてきた現実と課題 —上大謝名さくら公園から考える

秋本康太郎

私たちは「沖縄」に対してどのようなイメージを持つだろうか。「美しい海、食べ物が美味しい、基地がある」等、人によって沖縄に対してのイメージはそれぞれ違うだろう。しかし、実際に沖縄研修を通して、基地の影響が大きいということが確認できた。普段東京に住んでいると考えられにくい距離でオスプレイが飛んでおり、近くを通過すると会話が途切れるくらいの凄まじい音を放っていた。

特に「上大謝名さくら公園」では、基地からの影響の大きさを、身をもって知ることとなった。以下、「上大謝名さくら公園」で起きている現状とこれからの課題、そして基地周辺で住むということとはどのようなことなのかについて、考察していく。

上大謝名さくら公園は2017年8月に供用開始された宜野湾市の新しい公園である。そして、上大謝名さくら公園からは、フェンスで区切られた向こう側に、オレンジ色と白色の、軍用機が着陸する際に目安となる進入灯が見える。その先に滑走路があるからだ。

そして上大謝名さくら公園は危険性の高い場所でもある。なぜなら「クリアゾーン」と呼ばれる

エリアにつくられているからだ。クリアゾーンとは、「滑走路から延長線上300mのところであり、離陸も着陸も本来であれば人の出入りができない場所(もちろん住むこともダメな場所)」のことを意味する。その近くに住宅地があるということは、非常に危険性が高い場所に位置しているということになる。そして、宜野湾市にはクリアゾーンに約3600人の人が住んでおり、基地の影響を受けながらの生活を送らなければならないという状態になっているというのが現状である。

では、具体的に基地の影響を受けるとどのような問題を伴うのか。それは、主に「騒音」である。上大謝名さくら公園のすぐ近くには公民館があり、その屋根の上にマイクが設置されていた。このマイクで軍用機の離着陸の際の轟音を計測しているのである。実際に普天間基地では、2020年度に123dBが記録されている。これは、飛行機のエンジン音のすぐ近くにいるくらいの大きさである。

また、年間を通して、1万2721回(1日あたり34回)も騒音が発生しており、夜間でも95dB(※自動車のクラクション音と同じ大きさ)が記録されるなど、夜間騒音(22時半以降)も問題となっている。22時半以降ということは、一般的に子供は寝ている時間帯であり、この騒音によって子供が起きてしまうことで、健康被害にも繋がってしまうということが考えられる。

つまり、一番の問題は「騒音」なのである。しかし、騒音に対して国の規制では、夜間騒音の禁止も制定されている。それにも関わらず、一切守られていないのが現状なのである。宜野湾市民も国に対し、夜間騒音についての裁判を起し、国に対し問題の現状と禁止を訴え、国も賠償を行ったが、「飛行停止」という権限を持っていない為、騒音状況は今も存在するままなのである。

さらに騒音以外にも問題は多く、最近では「PFOS」「PFOA」による汚染問題も浮き彫りに

なっている。もともと宜野湾市は水が綺麗であり、湧き水が豊富な地域として有名であった。しかし、水が豊かな場所に基地を建設したことにより、基地から流れ出た汚染物質(発がん性を含む)が川に流れ出てしまったのである。基地からの影響なのに、これを処理しなければならないのも宜野湾市である。

私たちは、普段から基地が身近にあるわけでもないし、仮に基地問題の影響を受けたとしてもおそらく一日で解消され、次の日にはこれまで通りの日常が戻っている場合がほとんどだろう。しかし、普天間基地周辺に住む人たちは、今回の述べた「騒音」や「環境問題」ということも考慮しながら生活をしなければいけない為、「安心感」というものはおそらく基地周辺で住んでいる場合にはあまり感じなくなってしまうのではないかと。

自分の住む家が安全な場でないということは何を意味しているのか。騒音問題だけでなく、生活環境というところにまで基地の影響があり、その対策を願い出ても、いまだにそれが叶っていないという環境で、生活をしている人たちがいるということ、私たちは見て見ぬふりをするのではなく、基地周辺で起きている現状と問題を把握し、それらの問題に対して積極的に取り組んでいかなければならないのではないだろうか。

1. 8 沖縄国際大学

志村 碧

沖縄国際大学は昭和47年2月24日に当時の琉球政府の認可を得て翌2月25日に設置され、同年4月23日に地域に開かれた大学として開学を宣言した。次いで、昭和47年5月15日沖縄の本土復帰に伴い、「沖縄の復帰に伴う特別措置に関する法律(昭和46年12月31日法律第129号)」第94条第1項、「沖縄の復帰に伴う文部省関係法令の適用の特別措置等に関する政令(昭和47年4月28日政令第106号)」第1条第2項により学校教育法に規定する大

学となった。

アメリカの施政権下にあった沖縄には私立大学として沖縄大学と国際大学が設置されていたが、沖縄大学と国際大学の両校は大学設置基準の上でいろいろと困難な問題があるということから統合へ向けて復帰前に両校の理事会で話し合いがすすめられ、その結果、両校の理事会で統合整備の計画が成立した。これに基づき、統合が決議推進され、昭和47年2月24日、琉球政府私立大学委員会によって新設沖縄国際大学が認可された。

現在は、学生（大学院生含む）5,358名（令和3年5月1日）、専任教員132名、職員81名となっている。また、4学部10学科、大学院3研究科5専攻、4研究所を擁する規模となり、地域の専門的人材育成を担う大学として、さらに躍進を続けている。

その沖縄国際大学に普天間基地所属のヘリが墜落したのは、2003年8月13日（金）のことだった。この事故の光景を沖縄国際大学のホームページにて見ることができるが、かなり火の手が上がる大事故であった。

この墜落事故は、ヘリが空中分解をしていたため、沖縄国際大学だけでなく周辺の住宅へも被害をもたらしている。一部住宅では寝ている幼児のすぐ横にヘリの部品が落ちるといったかなり危険な状態であったが、大学が夏季休業期間であったことも幸いし、奇跡的に死傷者はでなかった。

一方で日米地位協定によって、この事故に関する調査を日本政府、警察は行うことができなかった。墜落したヘリは米軍の訓練中であったとし、この訓練に関して日本側から関与することができないため、学校にて課題に勤しんでいた学生たちは追い出され、この処理に関与できたのは消防のみであった。

その後、市長と米軍との面会の機会が設けられたが、その際に報告された米軍の原因調査では、2003年3月に始まるイラク戦争に米軍が関与したことで機体整備の需要が高まり、整備士の労働環

境が悪化したことによる整備不良とされ、しかも死傷者を出さなかったパイロットを称賛する旨の内容を語られる形となり、米軍側からの謝罪はなかった。

こうした墜落などの米軍による事故はかなり頻繁に起きている。こうした現状に関して沖縄県、日本政府が改善を行えないのには日米地位協定の存在が大きく、調査にかかわることや訓練に対して中止を要請することができない限り状況の改善は見込めないだろう。沖縄国際大学もそうだが、基地の近くというのはいつ事故があってもおかしくなく、常に危険と隣り合わせである。騒音への慣れがあったとしてもこうした事故は命を奪われかねないので日米地位協定の改善を早急に求める必要がある。

なお、沖縄を訪れての感想として、かなりの車社会であることに驚いた。実際に沖縄国際大学に通っていたさびらのスタッフによると、大学生のうちに免許を取得し、車で通学する人も多いと聞いた。東京では考えられないことである。

【参考文献】

沖縄国際大学ホームページ「本学の歴史」(<https://www.okiu.ac.jp/about/rekishu>)

1. 9 那覇港湾施設の浦添移転

大和田駿

那覇港湾施設（那覇軍港）の浦添移転について沖縄研修にて学習したことや自身で学習したことをもとに、まとめていく。

那覇軍港は、1974年に移設の条件付きで全面返還が日米間で合意された。その後、移設に関してさまざまな協議が行われた後、2013年4月に公表された「統合計画」にて、港湾施設の機能を浦添ふ頭地区（「浦添西海岸」）に移設することで返還されることになった。これには国だけではなく、県や那覇市、浦添市もこれに合意しており、那覇

港湾施設の移転はもはや決定事項となっている。その一方で、浦添市民を中心とする人々からは、移設に反対する声が多数上がっている。政府・沖縄県・那覇市・浦添市と地元住民とで意見が対立している形となっている。

現在、移転先となっているのが「浦添西海岸」である。ここは、もともとは、在日米軍の「キャンプキンザー」と呼ばれる基地の一部であった。港湾施設の問題とは少し離れるため、詳しくは紹介しないが、「キャンプキンザー」についても返還のための協議や議論が行われている。「浦添西海岸」は、この「キャンプキンザー」の一部が2018年に返還されたことを機に、海岸が一般市民に解放され、サンエーパルコシティのような大規模な商業施設が建設されるなどの開発がされてきた。この「浦添西海岸」に那覇軍港が移設してくるということなのだ。

次に、浦添移設が地元住民から反対される理由について触れていく。地元住民から反対される理由は、主に2つに分けられる。

1つ目が、基地に関連する問題である。これは、浦添の新港湾施設に限った話ではないが、基地ができる周囲の環境に大きく影響する。他の基地では、騒音や汚染水流出などの環境問題、基地周辺を米軍関係者が出入りすることから治安の問題などを懸念する住民が一定数いると考えられる。

2つ目としては、「浦添西海岸」の自然環境についての問題である。この海岸が返還されたのは2018年と最近のことである。それまでは、米軍の基地内にあり、この海岸の美しさに地元住民が気付く機会はほとんどなかった。だが近年は、パルコシティなどの商業施設もできたことにより、地元住民だけではなく県民にも親しい海岸となってきた。

その海岸が移設によって埋め立てられてしまう。また、「浦添西海岸」は、「宝の海」として親しまれ、珊瑚礁などの豊かな海資源も広がってい

る。このため、「浦添西海岸」の自然環境の豊かさから軍港の移設を反対する声が上がっている。実際に県民有志によるオンライン署名活動では、3万以上の署名が集まっている。

ここからは、実際に現地を訪ねて感じたことや私自身の考察を述べていく。実際に「浦添西海岸」を歩いてみてとてもきれいな海であると感じた。沖縄研修では、幾度となく海を見る機会があった。その中でも群を抜いてきれいであった。さびらの方のお話を聞いて、この海が埋め立てられることを知ると同時に、この海がなくなることを残念だと思った。

事前学習や辺野古での経験から私は、どんなに基地問題において地元が反対しても国の決定事項が覆ることはないと考えようになった。しかし、この「浦添西海岸」の話を知り、諦めることと知ることを放棄することは違うと感じた。政府をはじめとした、行政が那覇軍港の浦添移転を認め、合意している以上、地元住民による反対運動で合意が覆る可能性は低いと考えられる。それでも、他人事だと思わずに情報を取り入れ、関心を寄せることが重要である。

私たちは最後に、この浦添西海岸をバックに記念写真を撮影した。ゼミのみんなが写っている写真の風景が少しでも長く残せるように、今後もこの問題をはじめとした沖縄の基地問題について関心を持って自分にできることを模索していきたい。

【参考文献】

防衛省HP「那覇軍港施設の移設について」

https://www.mod.go.jp/j/approach/zaibeigun/saco/naha_isetsu.html 取得日2023年12月11日

琉球新報HP「米軍キンザーの土地を5月中に返還

1900平方メートル、日米合意」(更新日2021年5月26日)

<https://ryukyushimpo.jp/news/entry-1327892.html> 取得日2023年12月11日

琉球新報HP「那覇軍港の浦添移設、日米で「T字型」合意へ 今日開催の合同委で 浦添西海岸、民港北側に代替施設」(更新日2023年4月20日)

<https://ryukyushimpo.jp/news/entry-1697572.html> 取得日2023年12月11日

2. 辺野古集落での聞き取り

2.1 平穏だった町が基地によって姿を変えられてしまう

青山幸樹

まず、辺野古の海辺を散策した。基地建設の様子がよく見えるスポットということだったが、柵がありあまり見えないようになっていた。沖には船が何艘かいて、かなり警戒している様子があった。

続いて、住民運動組織の代表を務めていた西川さんの小さな事務所を訪ねた。ここでは辺野古の基地建設が始まるまでの変遷を聞いた。最初は反対派が勝ち取ったはずだったが、辺野古の有力住民の一人が名護市長をそそのかしたことにより、当時の橋本内閣に名護市長は基地の受け入れを表明した。しかし、辺野古区民側が提示した条件や補償は一切含まれておらず「だまされた」と感じたと当時の苦しい胸の内を語ってくれた。

さらに、現在すでに建設が始まっている場所が軟弱地盤であることがボーリング調査によって明



ARIGATOで話をうかがう

らかとなった旨も語っていた。硬い地盤のある場所まで砂杭を何本も何本も打ち込んでいく工法で、過去に前例がないという。半ば強引といえる基地建設に対して「もうこれ以上基地を拡げないことが重要である」という言葉は私に強く響いた。

話の最後に「自主的に辺野古に来てくれることを願っている」と言っていた。これからの未来を担う若者に関心と問題意識を持ってもらうことが大事であると改めて考えた。

その後、昼食を兼ねてSAKE&RAMEN ARIGATOに伺った。ラーメンは米軍が好む味に変えているらしい。そんなラーメンを美味しく食べ終えた後、店主の嘉陽さんに話を聞いた。

印象に残ったことは、米兵に対して恐怖心がほないこと、騒音が生活音の一部という認識になっていたことだった。基地周辺の店舗経営者は、米兵と仲良くなったり遊びに出かけたりするほどだという。さらには任期が終わり基地を去る米兵に対して「さみしい」という感情を抱くということも話してくれた。このラーメン店の訪問で、辺野古区民の抱く思いと私の考えていた辺野古区民の思いの双方にかなり違いがあることを知らされた。

最後に辺野古地区を散策した。人口は1800人ほどの小さな集落で、ここ辺野古も少子高齢化を受け人口減少の一途を辿っている。商店やバーなどの跡地がいたるところにあり、昔は賑わっていたようだが、廃れてしまった家も多くかなり寂れている様子だった。

海と山に囲まれ自然豊かで平穏だった町が基地によって姿を変えられてしまうのは心が痛い。地区の住民の意向は反映されることなく建設が進んでしまっている現状、話にもあったように沖縄の問題だけでなく日本の問題として捉えることが沖縄を守ることに繋がっていくのではないかと考える。

2.2 辺野古で感じた後味の悪さ

井上悠馬

辺野古基地における問題について、現地の人々に話を聞いた時に感じたことは「立場によって辺野古に対する気持ちは違う」ということであった。まず基地反対派の人に対して私が持った感覚は、どうしても基地に対して妥協することはないといったように感じた。

実際に辺野古に駐留する米軍の動き方を目の当たりにした時に、海上を走る米軍のボートの騒音や排気ガスの匂い、沖縄の海とはミスマッチすぎるフェンスや基地の敷地がとても印象に残っていて、ボートから出される騒音は、嘉手納基地における航空機の騒音とは違った恐怖心や物々しい雰囲気を感じさせた。また、辺野古の街並みも活気があるようには見えなかったため、ゴーストタウンと米軍基地というふうに見えた。これらのことを踏まえると、私自身が長くこの街に住んでいたとしたら米軍基地は「敵」として捉えていたはずである。それは基地反対派の人の意見と同じであると考えられる。

しかし私はあくまで東京の人間であり「よそ者」という立場であるため、客観的に辺野古と基地について考えていた。そのため、最初に話を伺った際の反対派の方の意見には「過激」というイメージが最後まで払拭できなかった。政治に対して「黒幕」といったキーワードを使うところからも辺野古に対する熱い気持ちが伝わったが、実際に話を聞いている際には「この意見だけを聞いていると自分の考え方で偏ってしまう」というのが正直な感想だった。

次に辺野古で米兵を相手に商売をする人の意見を聞いてまた違った辺野古に対する気持ちを感じた。本音では基地問題に対して反対であるはずなのだが、「諦め」と「生活がある」といった観点から基地を条件付きで容認しているのだと感じた。客層もほとんどが米兵であるということから

も、この土地で商売をするためには米軍基地による経済効果と基地問題に対する意見は矛盾するが切っても切り離せない関係にあるのではないかと私は考えた。米兵に対して良いところと悪いところ、世間的にどう見られるのか、知事など政治に対する不満など辺野古を取り巻く要素はどれをとっても前向きなイメージを持ってないように見えた。そのようなジレンマの中で商売をして生活をしていく人々は、反対派の活動に対して一歩引いたところから辺野古の基地問題を見つめているような気がした。

取材をした場所以外にも、辺野古の街並みの中にはタトゥーショップのような米兵向けだと考えられるお店や、アメリカ人が経営していると思われる店舗が散見された。辺野古を去る際に考えたことは、基地反対派の人々はこのように米兵に対して商売をする人やアメリカ人による商売に対しても敵対心を持つのかといったことであった。

それぞれが米軍基地に対して反対意見をもっていて、それに対する熱量の差を強く感じた。基地問題と生活に対するジレンマを感じたりする人もいれば、どうしても基地は無くすべきだと主張する人もいる。しかし、普天間基地を辺野古に移すといういまの計画は、辺野古の人たちの意見を割っており、また米軍基地の沖縄の中での「なすりつけあい」でしかない。そのことに後味の悪さを感じながら、辺野古を後にした。

2.3 どちらも間違っていない、辺野古に住む人のリアルな気持ち

大中はるひ

研修2日目の辺野古では、27年もの長期にわたって基地移設反対運動を続けている西川さんと、辺野古でラーメン屋を営む嘉陽さんにお話を伺った。

〔西川さんの願い〕

- ・近年、辺野古への若者の関心が集まっている。高齢になった西川さんらが話をしに行くのではなく、若者たちが実際に辺野古へ話を聞きに来てくれることが望ましい。そのためには今よりもいっそう若者間で辺野古への興味関心を広げていく必要がある。
- ・これから辺野古に基地ができて、山も海も取られた状態でさらに上空にはオスプレイが飛ぶようになる。
- ・基地に依存するのはよくない。若者が戻ってきても住むところがない。これは人口減少にもつながる。
- ・地元への愛着と子や孫たちの将来のために見届ける義務がある。
- ・これからは基地完成後の在り方や地域活性化、若者への伝承などに力を入れていく必要がある。基地問題はこれから議論するつもりはない。
- ・問題解決のための取り組み（選挙や会の活動）はつらいし、疲れてしまうし、周りの人々からの目が痛い。
- ・高齢化と長年続く活動により、「終わり」を考えている。続けていくためには若者の協力が必要だと感じている。

[西川さんのお話を通して]

基地反対の活動は精神的にも体力的にもつらいもので、お話を聞いていて本当に活動につかれてしまっていることが伝わってきた。自分の愛する地元を何とかして守りたいという思いは必ずしも地元住民と同じであるわけではないこと、自分の行動が否定されてしまうことはかなりきついことだったと思う。

沖縄の基地問題についてどう思うか質問をすると、西川さんは「同じ沖縄の認識ではない、嘉手納は嘉手納、辺野古は辺野古、普天間は普天間の問題で、それぞれ地元の問題だ。」とおっしゃっていた。

私はこの言葉に衝撃を受けた。今まで沖縄の基地問題は沖縄全体の問題であると考えていた。沖縄の人と同じ感覚だと思い込んでいたが、西川さんはそうではなかった。この質問に関しては同行してくれた株式会社さびらの安里さんも同じようなことを言っていた。安里さんは「そう答えざるを得ない」と答えていた。

この回答を通して私は基地問題がかなり根深いものであると再認識した。自分の地元を守るために精一杯であり、沖縄全体のことについては考えていられない。実際に同じ地域の住民に嫌がらせなどを受けた話を聞けば、それは安易に想像できる。同じ沖縄、同じ地域内でも分断が起こり、様々な考えの人々が暮らしているのだ。

また、これは負の連鎖が起きていることの表れだと感じた。今回普天間基地の移設先が辺野古に決まり、辺野古の住民は反対した。しかし、仮に移設先が辺野古ではなく他の地域だったらどうだっただろうか。辺野古の住民は「うちに来なくてよかった」と安堵するかもしれない。こう考えることは悪いことではない、誰しも当然そう思うはずだ。だがこれでは移設先が決まった他の地域の人が苦しむことになる。

これは沖縄に限った話ではなく、日本全体にも言えることだろう。「移設する」というのはそういうことだ。どこかの誰かがつらく苦しい思いをする可能性があるのだ。もちろん様々な考えの人がいるため、みんながみんな反対意見ではないだろう。しかし、この負の連鎖にはやはり日米地位協定が根底にあり、そこを改善することや国全体で考えていくことが何よりも沖縄の負担や住民の不安や不満を減らしていくために必要であり、日本全体のためにもなると強く思った。

[嘉陽さんのお話を通して]

次に嘉陽さんが営むラーメン屋さんで、ラーメンをご馳走になった。ラーメン屋を始めた理由は、

基地で働いていた時に米兵さんがラーメンが好きなことを知っていたことや、辺野古にきた米兵さんの食事処を作ったからだろう。

嘉陽さんのお話を聞いていて、西川さんとはかなり違う部分が多いように感じた。嘉陽さんからは西川さんのように基地反対の姿勢は強く見られなかった。というのも嘉陽さんは幼いころから米兵さんとの交流があり、それを楽しんでいたそう。米兵さんの食事処としてお店をオープンしたことからも見て取れるように文化交流を楽しみ、米兵さんとの距離がかなり近いように思えた。もちろん基地のすべてに賛成ではないし、基地についてどう思っているのか他の人と話したいとおっしゃっていた。

「反対ではないけど、賛成でもない。基地とどのように付き合っていくのかと考えたい」という中立的な立場を見て、同じ地域内でもこれだけ違いがあるのかと驚いた。沖縄内における高齢者層と若者層の間で基地への認識や考えに違いがあることは知っていたが、それを間近で見たような気持ちになった。

[辺野古全体を通して]

辺野古の現状について、嘉手納と同じように人々の複雑な思い交差していることを目の当たりにした。西川さん、嘉陽さん二人のお話を聞いて、「どちらも間違っていない、辺野古に住む人のリアルな気持ちだ」と感じた。時代が変化し、自分が年を取れば考え方は変化していくし、周りの状況も変わっていく。時間の経過というのは怖いものであり、最初は反対だった基地移設も受け入れ態勢になっている人が増えてきているのかもしれない。受け入れ態勢が「あきらめ」として人々の目に移ってしまうことはあまりにも悲しい。西川さんのように精力的に活動し、自分の体力や精神の限界を感じてやめていく人を私たちはどれだけ知っているだろうか。

沖縄に行って強く感じたのは、国や米軍など大きな組織の上からの命令や政策により、住民の気持ちりが簡単になくなってしまったということだ。先日、国の「代執行」が決まったが、これも国の一方的な決定であり、住民は「受け入れざるを得ない」状況になりつつある。こうなってしまうのはなぜなのか、解決のためにどうしたらいいのか、どのような活動が行われ、どのような支援が必要とされているのか等々私たちは目を光らせ、考えていくことが必要であると思った。

2.4 「賛成／反対」の先にある未来を考える

大和田駿

辺野古への普天間基地移設に伴う新たな基地建設について、沖縄研修にて学習したことと自身で学習したことを含めてまとめていく。

まず、辺野古の基地建設の問題について述べていく。辺野古に新基地が建設される理由としては、宜野湾市にある、普天間基地の代替基地として建設されることにある。普天間基地は、世界一危険な基地とよばれ、人口が密集している住宅街に隣り合うように基地が整備されている。また、普天間基地は飛行場であるため、地元住民は軍用機の離着陸による騒音被害や墜落などの事故の危険に常にさらされている。他にも環境問題としては、基地内から排出された汚染物質「PFAS・PFOS」が地下に染み込み近隣へと流れていくなどの問題も引き起こしている。これらのことから普天間基地は返還が望まれている。

返還が望まれている一方で辺野古への移設には反対しているのが、沖縄県と大半の沖縄県民である。沖縄県が反対する理由の一つとして、過度な基地負担がある。沖縄県には、日本全国の米軍専用施設面積の7割が集中しており、そこに新たに基地ができることは、沖縄の負担増加となる。また、辺野古移設には相当な年月を要することや、返還後も除染等の作業が必要になることから、普

天間基地の危険除去にならないことも主張している。

別の側面から見ると、辺野古には豊かな自然環境が広がっており、数多くの絶滅危惧種が生息しており、新基地の建設はこの自然環境を破壊しかねないことも指摘している。沖縄県民の民意としては、2019年の県民投票において約7割が埋め立てに反対している。そして沖縄県は、辺野古移設に関わりなく、普天間基地の運用停止を求めている。

ここからは、辺野古に訪れた際にお話をお聞きした、西川さんと嘉陽さんのお話をもとに考えたことを述べていく。西川さんと嘉陽さんのお話をお聞きして、同じ辺野古の住民でも全く意見が異なると感じた。西川さんは、基地の移設に全面反対派である。「命を守る会」や「へり基地建設に反対する辺野古区民の会」と呼ばれる、反対活動をする市民団体の代表を務め、後世の人たちに基地負担をさせたくないと奮闘されてきた。その一方で、同じ区民の間でも基地容認派と反対派でコミュニティが分断されていくことに嘆いていた。

一方で嘉陽さんは、一部容認派であった。その理由として、西川さんと違って米軍関係者と関わりが多くあることが背景にあると感じた。嘉陽さんは、辺野古でラーメン屋を経営されている。そこには、多くの米軍関係者が出入りし、お店に利益をもたらしている。また、嘉陽さん自身も米軍関係者と出かけることもあり、親交があると話されていた。辺野古への基地移設を容認する理由として、米軍関係者が増えて辺野古の活性化につながることや反対しても作られることを挙げられていた。お二方の話を聞いて、容認派と反対派で意見は違うが、辺野古を良くしたいという気持ちが根底にあり、正解も不正解もない、当事者の間でも難しい問題であると感じた。

事前学習や沖縄研修を経て、私は辺野古の基地問題について様々な可能性があると感じた。嘉陽

さんの意見からは、基地建設から辺野古の活性化を図ることができるし、西川さんの意見からは、反対し、仮に建設が中止となったら辺野古の住民の負担を軽減することができる。どちらも正しくて正しくないような複雑な気持ちになった。ただ、大事なのは、この移設問題を対岸の火事だと思って蔑ろにせず、自分自身の問題と思うことである。辺野古に行き、住民の方の意見を聞いたことで、今までとは、基地について違った見方ができるようになった。ただ、賛成・反対するだけではなく、その先の未来を考えることが必要だと学ぶことができた。

【参考文献】

- 沖縄県HP「沖縄県が普天間飛行場の辺野古移設に反対する理由」（最終更新日2022年10月5日）<https://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/henoko/r4revise/hantai.html> 取得日 2023年12月11日
- 琉球新報HP「辺野古区民の会解散 活動18年に終止符 反対運動新たなスタート」（最終更新日2015年4月12日）<https://ryukyushimpo.jp/news/preentry-241697.html> 取得日 2023年12月11日

2.5 辺野古区民の政治活動について

田中風花

私はゼミ研修で辺野古に訪れる前に、まず現状を知る為にゼミで『辺野古入門』を読んだ。そのうえで、私は辺野古移設の問題にあたって、辺野古区民がどのようにして市長選などがあつた際に政治活動に触れ、どこに投票するのか興味を持った。なぜなら、辺野古移設に大きく関わる2022年に行われた名護市長選は、投票率が高くなると想定していたのだが、実際は68.32%と高いことに驚き、なぜその数値になったのかについて疑問を持ったからである。もちろん東京都の市長選よりも投票率は高いものであることは承知している。そのうえで、名護市長選で投票しなかった3

割の中には、意図的に投票を行わなかった者もいるのではないかと考えた。そのような投票を行わなかった方のことを知る為にも、辺野古区民が政治活動に普段どのくらい関わるのか、どのように考えているのかについて知ることも重要だと考えた。

私たちはゼミ研修二日目に辺野古を訪ね、西川征夫さんの話を伺った。西川さんは辺野古の新基地建設に反対している方だ。米軍普天間飛行場の代替施設として新基地を辺野古に建設することが決定したことで1997年に辺野古の住民たちと「命を守る会」を立ち上げ、代表として基地建設反対を掲げ、長年住民運動を行ってきた。

私が西川さんから話をお伺いして驚いたのが、西川さんが辺野古移設の詳細を知るまでは自民党支持者であったことである。当初自民党支持者だった西川さんは、移設に関して詳しく知る前は容認していたが、「命を守る会」をつくるきっかけにもなった辺野古公民館で行われた「海上基地問題を考える会」で基地による悪影響を知り、考えが変わっていく。その会では普天間基地の現状や基地が市民生活に与える影響について説明があった。そこで初めて、西川さんを含めた辺野古区民は基地があることの重大さを知り、辺野古区民の間で基地建設反対の思いが強くなったのだと考えられる。

私は、辺野古区民が現在の複雑な状況に置かれている理由には、辺野古が元々は基地から経済的に良い影響を受けていたことが重要ではないかと考えた。西川さんも以前は自民党支持と言っていたように、辺野古がキャンプシュワブによって盛り上がった過去があるということは、米兵や米軍に対して元々は悪い印象を抱いていなかったということである。

その意味では西川さんに続いて話を伺った嘉陽さんの話からも、興味深い点があった。嘉陽さんは、かつては米軍基地で勤務していたこともあり、

現在は週末に辺野古で主に米兵向けのラーメン店を経営している方である。辺野古移設に関しては、移設しなくて済むのならしないでほしいというスタンスだが、反対を唱え続けるのには辟易しているような印象を受けた。嘉陽さんの父親が、自身の小さいころから米兵と交流していたこともあり、嘉陽さんも米兵と交流することは楽しいと語っていた。

話を伺う中で選挙期間には何か活動をされているのかと聞くと、インスタのストーリーで支持者への投票を呼び掛けたりしているとのことだった。また、この選挙期間の話に続いて、よくニュースでゲート前での反対運動をしているところが取り上げられるが、この運動をしている中に辺野古区民はいないと語った。なぜなら、辺野古区民は自民党支持者の保守派が多いからだという。そして、嘉陽さんも選挙の際には自民党がついている方に投票しているとのことだった。

このように辺野古区民は、普天間基地移設問題の当事者だとはいえ、全員が全員何かしらの選挙活動を行っているわけではなく、おそらく東京に住む私とほぼ変わらないような方もいると思われる。

また、辺野古区民とは別に、さびらの皆さんにも普段デモなどに参加するのか聞いてみたところ、何かの団体に所属しているわけではないので、パレードやデモに参加することはほぼないと回答をいただいた。ただ、さびらの皆さん方はTwitter等で自分の意見を発信されているので、沖縄県民の中でも当事者意識が強い方ではないだろうか。

西川さんと嘉陽さん双方の話を伺って、辺野古の歴史が意見に強く影響しているのだと知った。辺野古移設による新基地建設については反対だが、しかし米兵一人ひとりの個人に関してはむしろ好印象を抱いている人もいる。今回興味を持ったのは辺野古区民がどのようにして市長選などが

あった際に政治活動に触れ、どこに投票するのかについてであるが、そもそも辺野古区民同士で選挙や辺野古移設については聞きづらい話であるため、普段から議論を交わせる環境ではないことを再確認した。

また、政治活動については東京と変わらず、街にある選挙ポスターやビラ、地元のテレビ局、選挙カーとなるのだが、東京と決定的に異なっているのが「その地域全体で同じような意識を共有している」ことではないかと考えた。東京でその共有が無い理由は、東京では人の移りかわりの激しさから、人それぞれで異なった背景を持っていることや、親子三世代に渡って長く住んでいる人が地域に少なく、移住してきた家が多いとその土地の歴史をよく知らない人が多くなるからである。それに対して、辺野古では親子三世代に渡って辺野古に住んでいる人が多いため、両親や祖父母から辺野古について聞いたことは多く歴史についても触れるタイミングは多いのではないだろうか。地域全体で辺野古に住んできた人が多いことから、辺野古の歴史についても同じくらいの知識を持つ人が多く、また住民間でのコミュニケーションが密である辺野古では、同じような意見を持つ人が多くなるのではないかと考えた。

2.6 現場で話を直接きくことの意味

土屋 陽

辺野古は、日本の米軍基地問題の中でもかなり注目視されている地域の一つだ。基地建設に向けた工事を行う場所を遠くから見ることができたが、沖縄の綺麗な海辺や砂浜などの自然を埋め立てしているのだと思うと何とも言えない。もちろん基地の恩恵もあるだろうし、反対する意見もよくわかる。そうした考えを少しでも理解を深めるために今回は市民の方にお話を聞くことが出来た。

西川さんは長年運動に携わってきた方で、

NHK のドキュメンタリーにも出られた方だ。西川さんによれば、いまの辺野古は、反対の声もあるものの、どう基地と共存していくのか、基地をどう使っていくのかを考えている人が多いという。基地があるせいでコミュニティが崩れてしまったとか、住民に対する補助金などの支援がない、といった声も住民からは多かったという。そして沖縄県、国、住民、それぞれの思いや考えの疎通があまりなされていないというのも原因だという。風通しが悪いと感じることはあっても、国が工事や交渉をアメリカ側と勝手に行ってしまうことも多くなった分、中々声も届きにくくなったという。

国策という名目で着々と進められていると、今更声を挙げたところで計画変更や大きな路線変更というのも難しいというのが現状だという。日米安全保障条約がある以上、地方自治というよりも国主導の動きが多いからだ。

とはいえ、辺野古だけの問題ではなく、その他の基地周辺でも同様な声というのは挙がっているという。ここで一つ驚いたのは、「辺野古は辺野古」「その他はその他」というように地域ごとに分けて話を進めてほしいというのを仰っていたことだ。

そして、基地機能の拡大や既存基地と新基地を作るというのは全く別問題だということ。ここは強く話されていた。今の現状に満足しているわけでもなく、話し合いが進んでいる訳でもないのにまた新たな話を進めようとしている今の現状には納得がいかないという。

基地と共存していこうという考え方が広まり始めているともいっていた。これはまだまだ序章であり、次から次へと新たな問題が増えていけば、市民の民意はとれないのは当たり前だろう。この方のように以前から基地問題と向き合い、沖縄の未来を考えて行動を起こしてきた人にとっては疲れが隠せなくなったというのが実情であった。ご

本人も仰っていたこともあり、自分自身も市民の力を強制的に無くしてしまっている日本政府には疑問を隠せなかった。

もう一人、元軍雇用員で、現在は辺野古でラーメン屋を経営されている方の話も伺った。今の現状に対しては、元々日本政府には期待をしていなかったと仰っていた。普天間基地の移設や騒音トラブル等にはある程度理解はしているという。その中で国や生まれ故郷を守るための考えが必要なのではないかと、先ほどの西川さん同様に仰っていた。逆に沖縄の問題もあるのではという考えもあった。自分たちのような若い世代の声が少なく、上の世代しか声を挙げないことを例に挙げて、同世代や若者の声を聞きたいし、発信したいと強く仰っていた。元々このラーメン屋も米兵と市民のふれあいの場になればという思いでオープンされたといい、自分も元軍雇用員だからこそ米兵の良さもわかっており、良い部分も知ってほしいという強い思いがあった。そして国に対しての思いというよりも、まずは市民の声を知り、意見を持つことが必要だと感じているという。この方は実際YouTubeで発信する機会を作っているといい、地元を守ることと、沖縄以外の地域の人にも知ってほしいという2つの思いが強いなという印象を受けた。

今回直接現場を見て話を聞くことが出来た。直接話を聞くことでより一層言葉の重みだったり、願いであったりこれまで聞くまで理解を深められなかったニュースの真相であったり、現場を直接見ることができ、とても良い機会にもなったし、現在行われている国の代執行などのニュースにもより関心を持つことが出来た。

2.7 辺野古になぜ住み続けるのか

前田航大

辺野古でのフィールドワークでは、1つの調査テーマを設定して実施した。その調査テーマとは、

「辺野古に定住している方がなぜ定住し続けるのか」についてである。この調査テーマを設定した背景として、辺野古は観光等の素晴らしい面があるが、米軍基地による諸問題や離島による生活の不便さも抱えている地域である。その中で、なぜ辺野古に定住し続けるのか、その理由・要因は何かについて知ることを通して、インターネットやパンフレットに載らない辺野古の魅力や地域社会としての難しさについて知ることのできる機会であると考えたからである。

まず、調査テーマの結論は、「自分が辺野古でやるべきことを生み出し、遂行する」ために辺野古で定住し続けている、というものだ。だが、この結論は「当たり前の結果だろ」と思われるものかもしれない。しかし、辺野古での研修でお話を聞かせていただいた、西川さんと嘉陽さんの目的や考えによれば、それぞれがやるべきことを遂行していることを各人の中で最適な行動・取り組みであると、確信づけている。また、多くの不満や不安、葛藤を抱えながらも現在の辺野古で暮らし、辺野古の将来を良きもの、明るいものにするために奮闘し、前へと進んでいるのだ。

先に論じたお2人がどのような「やるべきこと」を生み出し、「遂行」しているのか。はじめにお話を伺った西川さんは、やるべきこととして「辺野古への基地建設について反対と訴える活動をする」ことをあげていた。この活動をするために、新聞やテレビ等の取材をいくつも受けているだけでなく、辺野古に構えた事務所での講演や書籍の販売などによって、基地問題の実態と現状について発信し続けている。しかし、お話を伺う前に独り事のように「取材は疲れる」「体力がもうない」とお気持ちを吐露されていた。また、命を守る会で辺野古住民と反対運動に取り組まれていたこと、現在の問題である代執行や裁判といった理解が難しい分野も、活動のために時間をかけてでも勉強されていることも踏まえて、西川さんにご自

身が仰っていた「言動よりも行動が大事」ということをしっかり体現されている。そして、今後の辺野古についてのお話で、「若い世代」という言葉を多く使用され、辺野古を変えていくためには「若い世代が中心に」なって動いてもらいたいとのこと。また、基地が辺野古へ移設された後は「辺野古の活性化に向けた活動をする」と仰っていただけでなく、「(辺野古を)見届ける責任がある」とも仰っていたので、今後もやるべきことを遂行し続けるという強い意志を感じた。

次にお話を伺った嘉陽さんは、幼い頃から辺野古で生まれ育った経歴がある。その中で、キャンプシュワブに所属する米兵との交流が幾度かあった過去と、インターネットで辺野古と画像検索すれば基地に関することしか出てこないことを不満に思い、嘉陽さんはやるべきこととして、「辺野古のイメージを変えるために、辺野古に米兵をターゲットにしたラーメン屋」を生み出したのだ。そして、ラーメン屋を営みながら辺野古についての情報発信を行うだけでなく、インターネット配信によって、自身の体験や経験、考えを示している。これらの活動を遂行する中で、嘉陽さんが営むラーメン屋が「辺野古の住民と米兵とが交流できる場」となることを目指したいと仰っていた。そのため、嘉陽さんは今後もラーメン屋を営みながら、基地の移設によって増える米兵達にラーメンを振舞い、少しでも辺野古の役に立てるように行動していく、と伺うことができた。

以上のことから、辺野古に住み続けているのはやるべきことを生み出し、遂行するためであると分かったならば、お話を伺ったお二方の「やるべきこと」に協力し、支援するために、西川さんからお聞きした話しを広めることや、直接西川さんのもとへ足を運んでもらえるような広報をする。また、嘉陽さんのラーメン屋を口コミで広げることや辺野古についての情報発信や配信のお手伝いなど、さまざま考え、実現可能性の高い物を確実に

にこなし、多くの若い世代の方々に辺野古について知ってもらう必要があるのだ、と考える。

おわりに

熊本 博之

研修のテーマは「米軍基地が沖縄にもたらしたもの」であるが、言うまでもなく在日米軍基地は沖縄だけにあるわけではない。また沖縄が望んで米軍基地を受け入れているわけでもない。どのような側面からみても、「日本の基地問題」なのであり、私たちはすべて当事者性を持っている。そのことにも気づく機会になったのではないかと思っている。

とはいえ、沖縄に在日米軍基地の約70%が集中していることは事実であり、それゆえに沖縄の人たち、特に沖縄本島に住む人たちは、米軍基地を近くに感じながらの生活を余儀なくされた。そのような生活における米軍基地の存在は、初日のワークショップで示された24の意見からも明らかのように、賛成／反対、メリット／デメリットで割り切れるようなものではない。そのことを、研修を通して肌身で感じ取ったであろう学生たちは、米軍基地に対する沖縄の様々な応答を、より深く理解できるようになったはずだ。そうした学生を1人でも多く増やしていくことの重要性を再認識させられた研修であった。

報告書の原稿には、学生たちが感じたこと、考えたことが、ほぼそのまま掲載されている。教員としては、こちらの意図した通りには伝わらなかったなと感じる部分もあるのだが、意図した通りの反応が得られたからといって、それが「成功」だということではないだろう。むしろ、想定外の反応こそ、実際に沖縄を訪れ、いろんな方の話を聞き、あるいは学生どうしで意見を交換するなかでしか得られないものである。

そして、このようにして得られた経験は、心の奥底に根付きやすい。ゆえに、これからも沖縄に

関することや、あるいは沖縄で見聞きしたことに
つながる出来事に接したとき、何度も思い返され
る記憶になるだろう。それこそが、体験を通した
「学び」なのである。